

て薬疹かなと思った時に、どのように対処したらよいかについて、わかりやすく講演をいただきました。

講演の四番目は、熊本地域医療センター小児アレルギー科医長の西奈津子先生に「食物アレルギーのファーストステップ」と題して、子どもの食物アレルギーは心配です。でも念のために除去することは栄養、成長の面からも望ましくなく、治療の基本は必要最低限の除去であり、そして食物アレルギーの予防にはスキンケアがとても大切であることなどをわかりやすく講演をいただきました。

講演終了後の質疑応答は、あらかじめ寄せられた質問に講演者が答える形で行いました。約二七〇人の来場者があり、内容を、八月三十日の熊本日日新聞紙面に掲載しました。

第六十八回は、十月二十日(日)にホテル熊本テルサにおいて、「あなたもわかる?知っておきたい感染症」と題して開催しました。

講演では、座長を熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター教授の松下修三先生と、熊本市立熊本市市民病院感染内科部長の岩越一先生にお願いしました。

講演の一番目は、熊本市立熊本市市民病

院感染内科部長の岩越一先生から「倦怠感と高熱ってインフルエンザ?」と題して、これからの季節、熱が出て体がだるいとインフルエンザが思い浮かびますが、他にも注意すべき疾患があり、その中で感染性の高い病気を、予防が重要な病気、早期診断が重要な病気を中心に講演をいただき、増加するマダニ関連の病気についても解説をいただきました。

講演の二番目は、済生会熊本病院消化器内科部長の今村治男先生(一部は済生会熊本病院管理栄養士 松崎凜子氏)から「吐き気と下痢ってノロ?」と題して、ノロウイルス、カンピロバクター等の病原体により、どのような機序で嘔吐や下痢症状が起こるのか、その対処法を解説し、大事な点は体内に入れないことで、基本的な注意点をわかりやすく講演いただいた後、管理栄養士の松崎凜子氏が食中毒を防ぐ具体的な方法を、わかりやすくお話しいただきました。

講演の三番目は、熊本産婦人科学会理事の片瀨美和子先生から「誰に相談する?性感染症」と題して、性行為が人から人への感染のきっかけとなる性感染症、多くが自覚症状に乏しいため、自分には関係ないと思っている人が多いのも事実で、誰もが正しく知り、予防をきちんと

実行することが大切であることを、わかりやすく講演いただきました。また、二十年余の中高生への性教育支援についてもお話しいただきました。

講演の四番目は、熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター教授の松下修三先生から「誰に相談する?エイズ」と題して、治療薬の進歩によりHIV(エイズウイルス)に感染しても普通に生きられる時代になり、治療をきちんと続けられればパートナーへの感染も起こらない。しかし、新しくHIV感染と診断される人数は減少しておらず、性感染症の予防は、自己責任だけではなく、正しい知識と共に性の多様性を受け入れられる社会が求められていることを、わかりやすく講演をいただきました。

講演終了後の質疑応答は、あらかじめ寄せられた質問に講演者が答える形で行いました。約百人の来場者があり、内容を、十一月二十二日の熊本日日新聞紙面に掲載しました。

第六十九回は、二月二十三日(日祝)にホテル熊本テルサにおいて、「克服したい!花粉症とぜんそくの最新治療」と題して開催しました。

講演では、座長を熊本大学大学院生命科学研究所耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講

座教授の折田頼尚先生と、熊本大学大学院生命科学研究所呼吸器内科講座教授の坂上拓郎先生にお願いしました。

講演の一番目は、熊本大学病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科講師の宮丸悟先生から「花粉症治療の最前線」と題して、スギをはじめとした花粉症は年々増加傾向にあり、今や国民の四割がスギ花粉症といわれている。花粉症のこと特に治療方法についてできるだけ最新の情報を、わかりやすく講演いただきました。

講演の二番目は、熊本市立市民病院診療部長・呼吸器内科科長の藤井一彦先生から「ぜんそくと花粉症」と題して、ぜんそくと花粉症・アレルギー性鼻炎は共にアレルギーを原因とする病気で、ぜんそく患者の六割以上は花粉症・アレルギー性鼻炎を合併しており、ぜんそくのコントロールのためには鼻炎の治療が重要とされている。ぜんそくと花粉症・アレルギー性鼻炎の関係と、ぜんそくの基本についてわかりやすく講演いただきました。

講演の三番目は、国立病院機構熊本再春医療センター呼吸器内科医長の中村和芳先生から「ぜんそく診療における吸入療法的重要性」と題して、治療の主役は気道の慢性的な炎症を抑える吸入ステロ